

シベリアに抑留されていた弟も戻ってきた。この年に生き残った家族全員が小清水で生活することが出来た。

それぞれに職も得て独立した。私達夫婦も長い間農業をしたが子供達も成長し独立して家を出た。私達も二人だけでの宮農に限界をさとり町に出て働いたがのちに北見に土地を求めて家を建てた。

四十九年九月母は八十六歳で亡くなった。身体の丈夫な母で年を取っても働く事が好きであった。五十年五月妹が稚内にて結婚式に出席した。昼頃に宗谷岬を通り幸いよく晴れていて樺太の知床半島がよく見えた。三十五年ぶりに見る島影に同行の弟も妹も懐かしさのあまり涙が止まらなかった。

今老いて家族と同居して何不自由なく孫に囲まれて楽しいが、やはり母も亡く夫もいまは亡く同じ時代を心身共に苦しみ合い悲しみ合った戦前戦後を思いめぐらし、あれこれと懐かしく回想しております。

引き揚げ前後の苦い思い出

北海道 原田 宏

小さい頃、父に聞いた記憶をたどってみると、父母は、昭和五年の春に渡樺したようだ。昭和十一年三月に母は死亡し、昭和十八年四月には父は再婚した。翌十九年十二月には妹が生まれた。

父は、本斗町にある日本油脂の工場に勤務し、私ども親子は、平凡ながらも、衣食住は不自由なく平和な生活を送っていた。

昭和二十年八月十五日終戦、ついに日本も敗れたんだなあとかやさしい思いでいっぱいであった。それから、二三日たって戦闘機が飛来し、鉄道線路ぞいに機銃掃射をしながら飛び去った。家が線路の近くにあったので、生きた心地がしなかった。それから間もなくソ連兵が真岡に上陸し、南下中との噂が流れ、不安な気持ちでいっぱいであった。

八月二十日になり、父は「女と十五歳未満の男子は北海道に一時疎開することになったから、差し当たりの生活に必要な物をまとめるように、船は明朝出航の予定だから急ぐように。」と言って勤務先に向かった。

夕方、父は帰宅し、「疎開している期間は長くはないだろうから、天売の祖父母のところに行くよりも、千恵子（姉）の嫁ぎ先（姉は樺太で職業軍人と結婚し、その実家が上芦別にあった。）で世話になりなさい。船は明朝出港ということになっているが、時間が正確でないから今晩から連絡船の待合所で待機しなさい。」ということなので、リュックサックや両手に持てるだけの食糧、日用品、着替えを持って待合所に向かった。

稚斗連絡船の待合所は、疎開する人々でごったがえしていた。そのうちに、被害はなかったものの戦闘機による機銃掃射は浴びるし、逃げまどう人々、泣き叫ぶ子供たち、戦争は終わったというのに、なんでこのようなめに合わねばならぬのかと思うと、腹だたしさでいっぱいだった。

待合所で眠れぬ一夜を明かし、父の「元気だな」との

声をあとに、二十一日の朝乗船を開始した。船は、海馬島航路の連絡船で「あかつき丸」と言う五十屯ぐらいの木造船。船内は客室、船倉、甲板まで人でびっしりだった。乗船したのは朝の八時頃だと思うが、出港したのは午後七時頃ではなかったかと思う。夕日は沈んでいたが、遠くに海馬島がかすんで見え、海はおだやかであった。

出港して間もなく、小型機による威嚇射撃が始まった。そして停船。何がおこったのか原因は全く知らされなかった。「ソ連領内に連行されるのだろうか」それとも「海の藻屑となるのか」人々は口には出さぬが、そのような気持をおさえ、泣き叫ぶ幼な子をあやしむながら、じっと耐えていた。

そんなことを繰り返しながら航海を続け夜明けを迎えた。遠くに宗谷岬らしいものが見え、これで助かると思いい。安堵の胸をなでおろした。

八月二十二日朝八時頃、あかつき丸は稚内港に接岸した。人々は疲れきっていた。これからの生活に不安を感じながらも、無事に着いてよかったという喜びを胸に上

陸し、稚内駅に向った。稚内駅には列車がはいっていたのでただちに乗車した。とたんに安心感からか、急に空腹を感じた。思えば、昨二十一日の朝に乗船してから、食事らしいものは口にしていなかった。そのとき、稚内婦人会のタスキをした、おばさん方が銀シャリの「おにぎり」を差し入れてくれたが、その「おにぎり」の味は、四十五年を経た今でも忘れることができない。感謝の念でいっぱいである。

やがて、滝川駅で乗り換え列車は上芦別駅に着いた。駅には、先に疎開していた姉が迎えにきていた。十月頃まで上芦別の義兄の実家で世話になっていたが、樺太の父のもとに戻る見込みはなくなり、義兄の復員前でもあったので、いつまでも三人が居候すると姉の立場もなくなると思い、一人で大売島に行き、祖父母と暮らすことになった。

天売小学校の高等科二年に編入され、昭和二十一年三月に卒業することができた。卒業後、天売郵便局の外務員に採用され、郵便、電報の配達に従事した。

昭和二十一年秋に義兄が復員し、「芦別に出てこない

か」と誘いがあり、母からも「いつまでも千恵ちゃんの実家で世話になっているのが苦痛だから、芦別に出てきて一緒に暮らそう」との便りがあり、昭和二十二年四月芦別に出てきた。母は、すでに芦別営林署独身寮の主婦として寮の一室を借り、住み込みで働いていた。義兄の口添えもあり、私は町役場の給仕として採用され、営林署の独身寮から通勤することになった。

天売島に住んでいた頃は、魚は豊富であったが米はなく、叔父たちは船に魚粕を積んで苫前方面で米と交換していたようだ。それでも主食は不足で、毎日、澱粉だんごに米がばらばらまじったお粥で、腹もちが悪く、腹がすいては干し魚を食べていた。芦別に來てからも食糧事情は悪く、母は独身職員の健康を考えて、献立には随分苦労したようだが、それでも栄養のアンバランスから二人が肺結核に侵された。

衣服にも苦労した。樺太から持ってきたお金はインフレで底をついて買うこともできず、役場に初出勤のときは、引揚者に支給された海軍下士官の軍服を着た。

昭和二十三年の春に、同じ本斗町に住んでいた叔父が

天売島に引揚げてきた。その便りによると、父は、昭和二十二年十月三十一日に、本斗町で病死したのでだびにふし、遺骨の一部と遺品を少し持ち帰ったとのこと。そして、天売島には親戚や知人が多いので、ここで葬儀をするから、すぐ出てくるようにという内容のものであった。

これより先に引揚げてきた父の知人の話によると、「間もなく引揚げることができると思うが、引揚げ後は虻田町の同社工場に勤務することに決まっているから、それまで頑張るように」とのことであり、それを唯一の支えに今日まで頑張ってきたので、一瞬目の前が真暗になり、虚脱感に襲われた。

親戚などの援助により、父の葬儀も無事に終り、上司や周囲の方々にはげまされ、気持をとりなおして職務に精励した。

昭和二十五年十月に母は、妹を連れて再婚したので、姉の家に同居したが、その姉も馴れない厳しい農作業など、急激な生活環境の変化に順応することができず、体調をくずして看病のかいなく昭和二十六年八月に死亡し

たので、私は役場の独身寮にはいった。寮にはいったものの安い給料では食費を払うと小遣いが出ないありさまであったので、自炊をした。幸い母の再婚先は農家であったので、たまには米や野菜を差し入れてくれたり、天売島の叔父は魚を送ってくれたので助かった。

昭和三十年九月には妻をめとることができ、自分の家に住み、今では子供二人は成人し、平和で安定した生活を営んでいるが、これも苦しい時代に職場の上司、同僚、周囲の方々の物心両面にわたる援助があったからであり、感謝の気持ちは永久に忘れてはならないと思っている。

戦後の父母を偲んで

北海道 佐々木 千恵子

私が終戦を迎えたのは、小学五年生で「日本が負けたんですよ」と言う先生と何だかわからないが皆で大声を張り上げ泣いたのを今でも覚えております。